

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：32670

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820045

研究課題名(和文) 『日記』から読み解くゴンクール兄弟における衣服と織物の表象研究

研究課題名(英文) Study of the representation of clothing and fabrics through a reading of the Goncourt brothers' Journal

研究代表者

高井 奈緒 (TAKAI, NAO)

日本女子大学・人間社会学部・講師

研究者番号：50631975

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：『日記』を精査した結果、衣服と織物をゴンクール兄弟が作品の中で頻繁に喚起し、また愛好したのは、それらが彼らが作品によって目指したものの2つを同時に表現しうる特権的な物質であるからであったという結論に至った。そのうちの1つは、歴史家として、小説家として、あるがままの19世紀後半の現代社会の生理学を描くこと。もう1つは、芸術家として色彩の美しさや調和を表現することである。彼らは衣服と織物のもつこれらの特徴を『日記』に迅速かつ敏感に捉えてメモし、その後さらに考察を加え、そしてより確信をもって、小説などの作品において表象したのである。

研究成果の概要(英文)：Close examination of the Journal leads us to conclude that the Goncourt brothers' predilection for and frequent mention of clothing and fabrics in their works result from the fact that these objects could reveal two things that the writers strove to show, both as historians and writers and as artists. These were, respectively, the unembellished physiognomy of modern society in the second half of the 19th century, and the beauty of colours and colour harmonies. The Goncourt brothers noted down these aspects of clothing and fabrics quickly but carefully in their Journal, and then, after further reflection and with more conviction, represented them in their novels and other works.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：フランス文学 服飾 絵画 ゴンクール兄弟 日記 小説 描写 19世紀

1. 研究開始当初の背景

ゴンクール兄弟の著作における衣裳の重要性については、フランス人研究者 Rose Fortassier (ローズ・フォルタシエ) の *Les Écrivains français et la mode : de Balzac à nos jours* (『フランスの作家とモード バルザックから今日まで』邦訳なし、Puf, 1988) の中に言及があるが、ゴンクール兄弟について述べた箇所はわずかであり、他に取り上げられている作家(バルザック、ボードレール、フロベール、ゾラ、マラルメなど)と比べて、衣裳がゴンクール兄弟にとってどれほど重要であったかは明らかではない。他には、アメリカの研究者 Emily Apter (エミリー・アプター) による *Feminizing the Fetish Psychoanalysis and Narrative Obsession in Turn-of-the-Century France* (『フェティッシュを女性化する 精神分析と世紀末フランスにおける語りの強迫観念』邦訳なし、Cornell University Press, 1991) があるが、ここでも他に分析対象となっている作家のうち1人(2人)として取り上げられており、ゴンクール兄弟と衣裳との特別な結びつきは明らかにされていない。

国内では、ゴンクール兄弟はジャポニスムとの関連で語られることが多く、著作は小説では『ジェルミニー・ラセルトゥー』と『娼婦エリザ』が1948年に翻訳されたのみで、ジャポニスム以外のゴンクール兄弟に関する研究もまだ非常に少ない。『日記』に関しては1959年から抄訳が出ており、2010年には斎藤一郎による新たな抄訳が岩波文庫から刊行され、『日記』の注目度が高いこと、歴史的証言としての重要性が認知されていることが伺える。しかし、日本関連以外でのその他の著作と同様、『日記』に関する研究はこれまでまだ行われていない。

このような国内外のゴンクールの小説や『日記』に関する研究状況の中、本研究代表者がこの研究を志すこととなったきっかけが2つある。1つ目は、博士課程で「19世紀後半のレアリスム文学における女性の身体裸体と衣裳」という主題で研究を行った際、他の同時代の作家と比較して、ゴンクール兄弟の小説において女性の衣裳が特別なテーマだと分かったことである。2つ目のきっかけとなったのは、2011年10月パリ西大学ナンテールとプレスト大学との共催で行われた「ゴンクールの『日記』」と題されたシンポジウムで発表を行うため『日記』はフランスで2005年から詳細な注のついた新しい版の出版が始まり、現在研究者の間で非常に注目度が高い、「ゴンクール兄弟の『日記』における衣服とモード」について研究を行ったことである。

これらの研究から、『日記』がゴンクール兄弟の感性や思考のエッセンスを表現する非常に重要なものであることが明らかになり、彼らの作品や芸術的思索において特権的な位置をしめる衣服や織物が彼らにとって

何であったかを理解するためには、『日記』をよく調べることが最良の道だと確信するに至った。

2. 研究の目的

本研究課題「『日記』から読み解くゴンクール兄弟における衣服と織物の表象研究」の目的は、19世紀フランスの小説家・歴史家・美術評論家であるゴンクール兄弟(兄エドモン: 1822~1896年、弟ジュール: 1830~1870年)がつけていた『日記』(Journal, 1851~1896年)の記述をもとに、ゴンクール兄弟にとって衣服や織物(布地)とは何か、何を表すものであったのかを明らかにすることである。

構成は3部から成り、【第1部】では『日記』の中でゴンクール兄弟の生きた時代のモードがどのように描写されているか、実際の服飾史と比較しながらその歴史的価値を検証する。【第2部】では、『日記』とゴンクール兄弟が書いた小説の両方を参照しながら、それらの中で特定の衣服や織物にゴンクール兄弟がどのような価値を与えているのかを明らかにする。【第3部】ではゴンクール兄弟の『日記』と小説の両方における、衣服や織物の表象の絵画的な特徴を明らかにする。

3. 研究の方法

研究の第1段階では、ゴンクール兄弟の『シャルル・ドゥマイー』以降の全ての小説を読み直し、衣服や織物に関する記述を抜き出して、男女別・衣服別・階層別に分類し、それぞれにどのような意味が与えられているのかを考察する。次に、これらの記述を『日記』の中から抽出した、衣服や織物に関する記述と比較・検討して考察を深める。第2段階では、『日記』における衣裳の記述と服飾史における衣裳の記述をより厳密に比較し、『日記』の歴史的価値を明らかにする。第3段階ではゴンクール兄弟と親しくしていた衣裳の画家たちとの交流を調べ、ゴンクール兄弟自身が衣服を絵画的に描写する際に彼らの影響がどのようにみられるかを考察する。最後に、晩年に兄エドモンがこだわっていた室内装飾と織物の関係を明らかにする。研究は基本的に東京で行うが、19世紀の衣裳をロンドンとリヨンの博物館に見学に行き同時に資料収集も行う。パリでもフォルネー図書館やガリエラ美術館や国立図書館などで19世紀の衣裳に関する資料調査を実施する。

4. 研究成果

(1)【第1部】『日記』におけるモードの記述を服飾史と比較・分析し、その歴史的正確性・歴史的価値を明らかにした。

ダンディ・スタイルについて

フランスや日本で出版されている服飾史に関する本を中心に調査を行ったところ、いわゆるダンディ・スタイルは、フランスでは

王政復古期の 1820 年頃にブームとなり、その特徴を変えながら、1830 年代のロマン主義の作家たちに受け継がれていったことが分かった。本格的なブルジョワの時代となった第二帝政期には、その数はかなり減ったようであるが、正確には、どのくらいダンディの格好をしていた人が存在したのかは服飾史の記述からは分からなかった。

ゴンクール兄弟の『日記』は 1851 年から始まり、服飾史からするとその頃はすでにダンディ・スタイルはすたれていたと考えられるが、ダンディとはいかないまでも、まだカラフルな衣裳を着ていた男性がいたことが多くの『日記』の記述から明らかになった。また、ガヴァルニからの話で、彼の活躍していた時代の人々のいわゆるダンディな服装が伝えられている(バルザックの服装など)ほか、ダンディ・スタイルを受け継いだといわれる Jeune-France と名付けられたグループの 1 人、ゴートイエの派手な衣裳や、ユゴーやバルベール・ドールヴィイの独特のスタイルが『日記』には記されており、貴重な資料となっていることが明らかになった。

エステティック・ドレスについて

エステティック・ドレスとは、英国で 1880 年代、ラファエル前派の絵画の影響を受け一部の人たちの間で流行した、コルセットを付けない古代ギリシア風あるいは中世風のドレスのことである。ゴンクールの『日記』にパリでこのドレスを着ている人たちにに関する記載がある一方、フランスの服飾史の本には記載が見られないため、さらに調査を進めた。

結果として、ロンドンにおける資料調査などにより、イギリスや日本の服飾研究家の著作には、パリにも 1890 年にリバティー商会が設立されたことが記されているものがあることが判明したが、フランスの主な服飾史の本や、パリで資料調査を行った当時のモード雑誌にもエステティック・ドレスの流行に関する記載はないことが分かった。また僅かに記載のあるイギリスや日本の服飾史の本にも、フランスで具体的にどのような人々がエステティック・ドレスを着ていて、実際にどのような格好をしていたのかという説明はないことから、『日記』におけるエドモンによるエステティック・ドレスの描写は、このドレスのフランスでの流行を示す、稀有な歴史的資料であるといえることが明らかになった。

『日記』におけるエステティック・ドレスの記述に関して、2014 年 1 月にパリ・ナンテール大学で開催された「パリジェンヌ」と題された国際学会で研究発表を行う予定であったが、研究者の健康上の理由により、渡航及び発表を取り止めざるを得なかった。今後、この研究報告は、フランスの学会誌もしくは日本の学会誌において行う予定である。

その他の衣服について

『日記』にはその他、舞踏会の服装、グリ

ゼット、パリの街の人々、売春婦や労働者、病院での入院患者、普仏戦争やパリ・コミューン時の兵士や街の人々、旅先で見かけた農民や地方の人々の服装の詳細な記述が多くみられる。これらは一般の服飾史の本には見られないものであり、重要な歴史的証言であるといえる。

まとめ

『日記』においては、日常のコンテクストの中で衣服が描かれることで、人々が実際にどのような服装をしていたのか、生活の中での人と服との関わり合い、当時の人々が服装にどれだけ気を使っていたか、服装のコードがどれほど厳しく、そのコードを人々がどのように共有していたかが、非常によくわかる。これは服飾史の本からだけでは理解しえないことであり、『日記』の歴史的価値が大きいことが確認できた。特に、有名な作家たちの服装やフランスでのエステティック・ドレスの普及については、フランス及び日本において管見する限りまだ研究報告が行われていないため、今回の研究は非常に意義のあることである。発表する機会を早めに持ちたいと考えている。

(2)【第 2 部】では、『日記』とゴンクール兄弟が書いた小説の両方を参照しながら、それらの中で特定の衣服や織物にゴンクール兄弟がどのような価値を与えているのかを明らかにした。

燕尾服(habit noir)について

ボードレールは「1846 年のサロン」において、陰鬱な黒一辺倒の燕尾服でもダンディの卓越性を表現することが可能であると説いた。けれどもゴンクール兄弟は、時折ボードレールの言葉を引用しながらも、終始一貫して、燕尾服の着用をブルジョワ的な平準化を象徴するものとして否定的に捉え、『日記』や小説(特に『シャルル・ドゥマイー』や『マネット・サロモン』)の中で燕尾服を着る人々を揶揄していることが明らかになった。

白ネクタイ (cravate blanche)について

白ネクタイは、燕尾服と同様、夜会での正装時に着用が必要とされた。白ネクタイに関しても、ゴンクール兄弟はブルジョワの見栄や凡庸さのようなものを読み取っており、『日記』や小説の中でこれを身に着ける人を戯画的に描いている。

フランネルのチョッキ(gilet de flanelle)について

『日記』に何度も見られたフランネルのチョッキに関する記述について、これまでそれが何であるのか、何の意味があるのか分からなかった。服飾史の本を詳細に調べたところ、フィリップ・ペローの『衣服のアルケオロジー』にこれに該当すると思われる記述があった。フランネルのチョッキは、19 世紀の半ば頃からシャツの上または下から上半身を包み込むように着用が始まり、その暖かさ快適さから、この衣服に過度に依存してしまう

危険さえ医師たちによって語られていたという。この記述に照らしてゴンクール『日記』や小説の中にあるフランネルのチョッキに関する記述を読むと、この衣服は「ブルジョワの洗練されていない快適さを好む傾向」を揶揄するとき言及されていることが明らかになった。またゴンクール『日記』の記述にも、なかなかフランネルのチョッキを脱ごうとしない人々の様子が報告されていることから、ペローの記述と一致しており大変興味深い結果となった。

チュール(tulle)について

エドモンによる最後の小説『シェリ』では、チュールがシェリの処女性や、垣間見える彼女の肉体的魅力を掻き立てるために効果的に喚起されている。これはこの布地に対するゴンクール独特の感性によるものであったのか、それともこの時代に共通する感性であったのか、そしてなぜチュールでなければならなかったのかを検討した。

その結果、バルザックの小説ではチュールのボンネットは年配の醜い女性の属性として用いられ、チュールの肩掛けは若い女性の肉体的魅力を掻き立てながら同時に処女のヴェールを喚起し、またチュールの衣服は完全に理想化された純粋さをも表しうることが明らかになった。ゾラの『ルーゴン・マッカール叢書』では『獲物の分け前』のルネのみがチュールのドレスを身に纏うが、それは彼女の受動性と脆さを表していることが分かった。ゴンクール兄弟の『日記』には、チュールのドレスは純粋な少女だけではなく、売春婦たちも着用していたことが記されている。けれども彼らは小説の中では、うら若い処女だけにチュールのドレスを着せており(ルネ・モーブランとシェリ)、特にシェリのチュールのドレスが何度も繰り返し喚起される。これは、決して全てを包み隠すことなく、覆っている中身を想像させる半透明な布地であり、19世紀になって大量生産が可能になったチュールが、19世紀後半を代表する少女として、その生理学的成長と人工的な美しさをエドモンが詳細に描くシェリの特徴を最も正確に、象徴的に表すことができる布地であるからだ結論付けた。

この研究成果に関しては、2013年9月にフランスのムーラン(クレルモン・フェラン)で行われた、「テキスタイルの社会詩学 19世紀の作家における布地と衣服」という国際学会において発表を行った。今までにない新しい視点で布地と文学作品における衣裳を分析した点で高い評価を受けた。今年中に、論文集が刊行される予定である。

まとめ

の燕尾服、の白ネクタイ、のフランネルのチョッキについても、管見するがぎりこれまでフランスでも日本でも研究がないことから、発表することで19世紀の社会とゴンクール兄弟の小説や『日記』における思想に対する理解がより深まることになる

考えている。早い時期に日本かフランスの雑誌に論文を発表するつもりである。またに関しては、で記した国際学会でのある研究者のボードレールと燕尾服に関する発表が大きな理解の助けとなったことを付記しておく。

(3)【第3部】ではゴンクール兄弟の『日記』と小説の両方における、衣服や織物の表象の絵画的な特徴を明らかにした。

モードの画家からゴンクール兄弟が受けた影響について

ゴンクール兄弟は、ガヴァルニ(1804 - 1866)との1852年の出会い以来、常にモードの画家と交流があった。彼らとの付き合いが、ゴンクール兄弟が衣裳を愛好したり描いたりする上でどのような影響を及ぼしたかについて調べた。その結果、やはり一番大きな影響を及ぼしたのはガヴァルニであることが分かった。彼らはガヴァルニや彼が持っていた仲間のデッサンを実際に目にすることで、デッサンに関する審美眼を養ったといえる。仕事の仕方においても、まず「あるがままの自然を観察する」ことの重要性、そしてそれを自分のイマジネーションを混ぜて再表現するという技を、ガヴァルニから学び、その姿勢を生涯大切にしていることが『日記』の記述から明らかになった。そして、「ガヴァルニのみが、19世紀の人々の生活と衣服の画家である」と述べていることから、生涯ガヴァルニを師とし、なおかつ自分たちも作家のペンによってそうなることを目指していたことが伺えた。

弟ジュールが亡くなってから兄エドモンが懇意にしていたのはイタリア出身のモード画家ジュゼッペ・デ・ニッティス(1846-1884)である。エドモンは、「デ・ニッティスは、パリの街の真に才能のある風景画家である」(1883年6月2日)と彼を称賛していた。『シェリ』のジョンティアのモデルとなった当時の有名なクチュリエ、パンガのアトリエを訪問したのもデ・ニッティスの仲介によるものである。デ・ニッティスとエドモンが交際を深めたのは、衣裳への関心のほかに、特に日本の絵画や工芸品の愛好が共通していたことが大きいと考えるに至った。後述するように、エドモン・ド・ゴンクールにおいては、日本の工芸品などへの愛好と衣裳の愛好が結びついていることから、この点についてデ・ニッティスとの交際についても今後より深く考察を続けていくことが必要だと考えている。

デ・ニッティスの死後、エドモンが最晩年に親しく交際していたのは、モード画家、アントニオ・ド・ラ・ガンダラ(1862-1917)である。彼はレンブラントやベラスケスを好んでいたことから、エドモンとも趣味が合ったと考えられる。この画家との交際によってエドモンは19世紀後半の華やかな社交界とも関係を持ち続け、華美な衣裳をまとった

人々を頻繁に目にする機会を得続けていた
とあってよいことが明らかになった。

ゴンクール兄弟が『日記』の中で実際に
目にした衣服や織物を絵具のようにして描
写する場合の特徴について

ゴンクール兄弟が絵画的な描写を行うの
は、衣服に関してのみではないが、衣服に関
しては特に多くの絵画的描写があることか
ら、衣服は彼らの絵画的感性と分かちがたく
結びついていることが明らかになった。その
際、ゴンクール兄弟は、特に服の色やニュ
アンスと目にした光景との全体との調和を重
視している。中でも興味深かったのは、普
仏戦争とパリ・コミュン時の兵士や民衆の
様子を、彼らの服装の色や種類を用いて絵
画的に描写していることであった。歴史家
であろうとすると同時に芸術家であろうと
する姿勢がここでも強くみられ、その態
度は『日記』において終始一貫しているこ
とが分かった。

装飾における織物の果たす役割につ
いて

エドモン・ド・ゴンクールが本格的に室内
装飾に凝りだしたのは、弟ジュールの死後
である。エドモンは、以前からペルシャ絨
毯や、フランスの伝統のタピストリーにも
魅せられていたことが『日記』から明らか
になったが、本格的に室内装飾に凝りだし
てから最も魅せられていた織物は日本の
袱紗である。エドモンが袱紗の収集に熱
中する大きな一つのきっかけとなったのは
、多くの袱紗を所有していた画家デ・ニ
ッティスとの出会いであると『日記』から
は考えられた。そして袱紗にエドモンが
魅せられた理由はその色合いや織り込ま
れたモチーフの美しさであることが分か
った。エドモンは、袱紗以外にも、陶磁
器や掛物などの収集にも熱心であったが
、『日記』を精査することで、これらの品
々にエドモンが強く惹かれたのは、絵画
に対してと同じようにその色彩の美しさ
や豊かさに惹かれたからであることが明
らかになった。袱紗は織物である点から
、彼が絵画の中や実際の衣裳に惹かれて
いたことと共通する。この点については
まだ日本でも海外でも深い考察がなされ
ていないことから、今後何らかの形で発
表したいと考えている。

まとめ

海外ではジャポニスムにおけるデ・ニ
ッティスとエドモンとの関係について、
Manuela Moscatiello (マヌエラ・モ
スカティエッロ) が研究ですでに言及し
ているが、モードとの関連においては管
見するかぎりまだ少ないことから、本研
究において、ゴンクールとデ・ニッティ
スにおけるジャポニスムと織物(袱紗)
の関連を発見したことは国内外の研究
において大変意義のあることだと考
えている。ジャポニスムに関してはまだ
知見を深めることが必要だと考
えているが、今後もこの点について研
究を続け、何らかの形で発表
したいと考えている。

デ・ニッティスと同じく、ラ・ガンダラに

ついても、日本ではラ・ガンダラへの研究
の言及は非常に少ないことから、今後エ
ドモンとの交流に関して考察を深めて
発表することは非常に意義深いと思
っている。

また、画家ではないが、マチルド皇女
がエドモンの衣裳の愛好に関して大き
な役割を果たしたことも明らかにな
った。エドモンは彼女のドレスの趣
味を「色彩画家の色使い」と述べて
称賛しており、また彼女のサロン
でデ・ニッティスと共に多くの華
麗な衣裳を目にし、日記に書き留
めた。デ・ニッティスの絵画にも
マチルド皇女のサロンの様子が
数多く描かれていることから、
彼女の存在は、エドモンとイ
タリア人画家を結ぶものでも
あり重要である。今後はこの
点に関して研究を続けてい
きたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者
には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

高井 奈緒、「19世紀フランス文学にお
けるテキスタイルとテキストの研究 ムー
ランで9月に開催されたコロックから」、
自然主義文学研究会、2013年10月26
日、別府大学。

Nao TAKAÏ, « Le tulle et la
représentation du corps féminin chez les
écrivains français du XIXe siècle : Balzac,
Zola et les frères Goncourt » (「19世紀
の作家におけるチュールと女性の身体表
象 パルザック、ゾラ、ゴンクール兄弟」),
Colloque international « Sociopoétique du
textile : tissus et vêtements chez les
écrivains français au XIXe siècle » (国
際学会「テキスタイルの社会詩学 19世紀
の作家における布地と衣服」), 2013年
9月6日、Centre National du Costume de
Scène (国立舞台衣装センター)、ムーラン
(フランス)。

〔図書〕(計2件)

Nao TAKAÏ, « Le tulle et la
représentation du corps féminin chez les
écrivains français du XIXe siècle : Balzac,
Zola et les frères Goncourt » (「19世紀
の作家におけるチュールと女性の身体表
象 パルザック、ゾラ、ゴンクール兄弟」),
Actes du colloque international «
Sociopoétique du textile : tissus et
vêtements chez les écrivains français au
XIXe siècle » (『国際学会「テキスタイル
の社会詩学 19世紀の作家における布地
と衣服」論文集』)、掲載予定。

Nao TAKAÏ, « vêtement » (「衣服」)
の項を執筆)、*Dictionnaire des Naturalismes*
(『自然主義事典』), sous la dir. de
Colette Becker et Pierre-Jean Dufief (コ
レット・

ベッケール、ピエール＝ジャン・デュフィエフ監修), Paris, Honoré Champion, 刊行予定。

〔その他〕

ホームページ等

『ゴンクール兄弟の部屋』

http://let.sakura.ne.jp/goncourt/sur_ceil_site

6．研究組織

(1)研究代表者

高井 奈緒 (Takai, Nao)

日本女子大学・人間社会学部・講師

研究者番号：50631975

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし